

要 旨

本研究は、特別な教育的支援を必要とする児童のコミュニケーション能力を高めるために、客観的な見取りの手立てを探り、見取ったことを支援に生かす流れを事例研究を通して明らかにしたものである。客観的な見取りを行うための手立てとして、チェックリストやシートの作成、心理検査の活用を行った。また、それらで見取ったことを基に、コミュニケーション能力を高めるための個に応じた支援プログラムを作成し、実施した。

〈キーワード〉 ①客観的な見取り ②見取りを生かした支援 ③特性とコミュニケーションの状況 ④コミュニケーションの基盤

1 研究の目標

特別な教育的支援を必要とする児童のコミュニケーション能力を高めるための適切な支援を探る。

2 目標設定の理由

特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーターとして、発達に偏りのある児童の支援に携わってきた。校内の児童支援研修会や特別支援校内委員会等で多く出されるのが、児童のコミュニケーション能力に関する問題である。また、各担任が作成した個別の支援計画の中にも、児童の実態としてコミュニケーションについての記述が多く見られる。これらのことから、発達に偏りのある児童は人とよりよくかかわることが難しい場合が多いことが伺える。さらに、このコミュニケーションの問題が、友達とのトラブルや孤立化等の二次的問題を引き起こしているようにも思う。児童の支援を行う上で、コミュニケーション能力を高めるための手立てを探ることは、重要な課題であると言える。

これまで自分は、児童のコミュニケーションについて、経験と観察だけによる主観的な見取りを基に支援を行ってきた。その結果、児童の活動がスムーズに進まなかったり、思うように支援の効果が上がらなかったりしたことが何度もあった。それは、児童の思いに目を向けることができなかったり、特性を正確に把握できなかったりしたためではないかと考える。児童のコミュニケーションの状況や特性は一人一人異なる。適切な支援を行うためには、正確な見取りを行うことが必要である。主観的ではなく、客観的な見取りを行うことの必要性を強く感じる。

そこで、まず、個々の児童の特性やコミュニケーションの状況、コミュニケーションを支える要素の状態を客観的に見取るための手立てを探る。そして、その手立てによって見取りを行い、それを基に個に応じた適切な支援へつなげていきたいと考える。適切な支援を行うことにより、児童のコミュニケーション能力を高めることができ、人とよりよくかかわれるのではないかと考え、本目標を設定した。

3 研究の内容及び方法

- (1) 文献研究やアンケートを活用して、コミュニケーションについて理論研究を行う。
- (2) 児童の特性やコミュニケーションの状況を客観的に見取るための手立てを探る。
- (3) 見取ったことを支援に生かすための手立てを探る。
- (4) 支援計画・プログラムを基に、対象児への支援を行う。
- (5) 研究の成果と課題をまとめる。

4 研究の実際

(1) 支援を始める前に

適切な支援とは、児童の実態を客観的に把握し、児童の特性に応じた支援であると考える。そこで、適切な支援を探るために2つの方法を考えた。1つは、客観的な見取りの手立てを探ることである。そのために、チェックリストや見取りのためのシートの作成、心理検査の活用を行うことにした。2つ目は、見取りを生かした支援を探ることである。客観的、総合的に見取ったことを支援につなげる流れを考えることで、適切な支援ができるのではないかと考えた。また、見取りや支援を行う上では、教師のコミュニケーション能力や感性、心理検査の技能が大切である。そこで、教育相談スキルアップ研修や心理検査の研修を行っていくこととした。

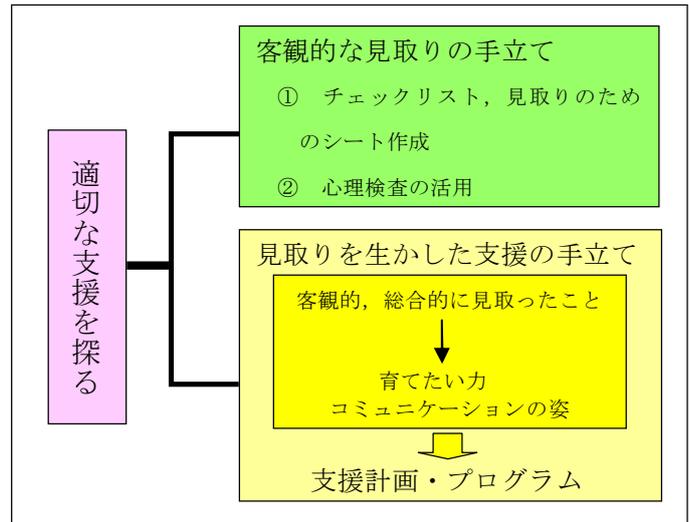


図1 適切な支援を探るために

また、見取りや支援を行う上では、教師のコミュニケーション能力や感性、心理検査の技能が大切である。そこで、教育相談スキルアップ研修や心理検査の研修を行っていくこととした。

(2) 見取りから支援への流れ

見取りから支援までの流れを表したのが図2である。

ア 大まかに捉えるためのチェックリスト

コミュニケーションの面で気になる児童がいた場合、このコミュニケーションチェックリストを活用することで、問題となる所を大まかにつかむことができる。このチェックリストの作成に当たっては、より客観的な観点にするためにKJ法を活用し、たくさんの人の考えを参考にした。そして、聴覚認知に関すること、言語理解に関すること、言語表現に関すること、非言語表現に関すること、状況把握に関すること、関心・態度に関すること、コ

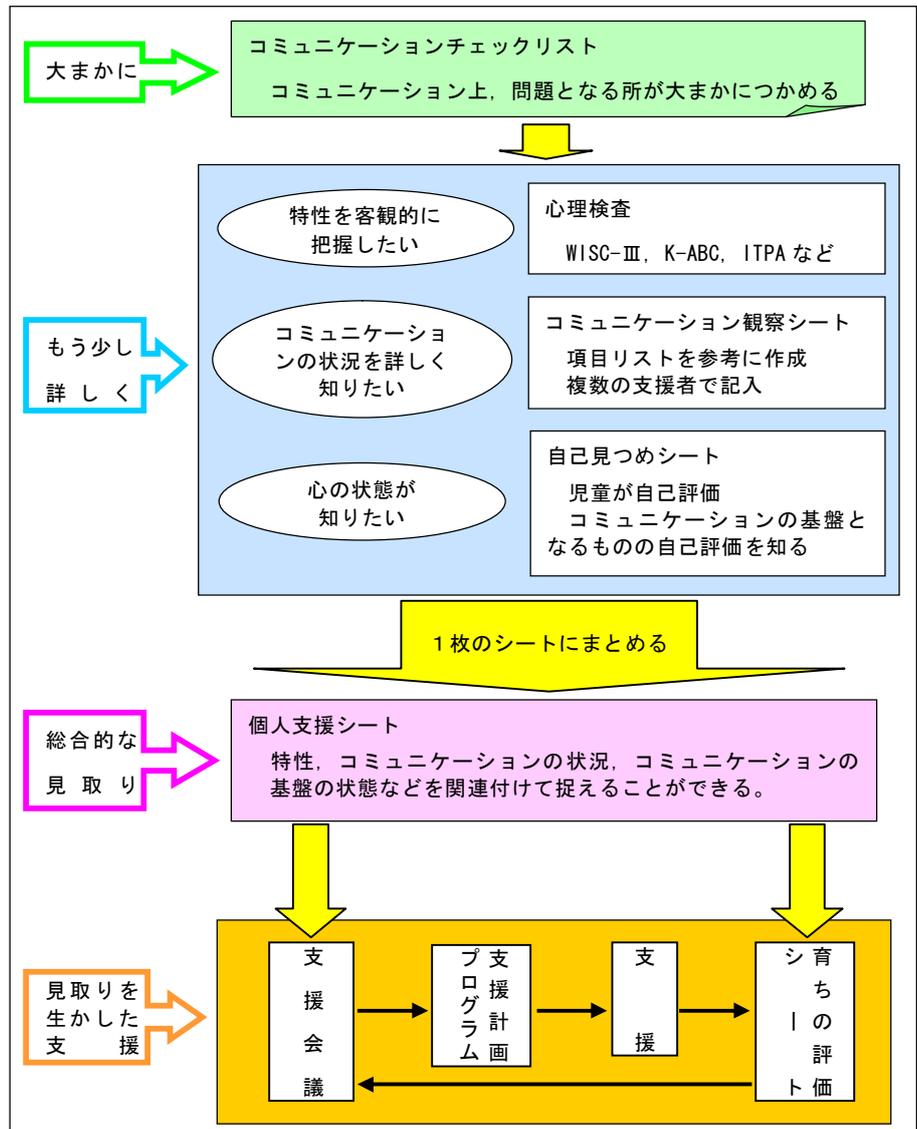


図2 見取りから支援までの流れ

コミュニケーションの基盤に関することの7つの観点を出した。この7つの観点で児童の状況をチェックすることで、詳しく見取った方がよい所を知ることができる。また、簡単にチェックできるように項目の数を絞った。

イ もう少し詳しく見取るために

次に、もう少し詳しく知るために、心理検査、コミュニケーション観察シート、自己見つめシートを活用する。児童が人とよりよくかかわるためには、コミュニケーションのスキルと心のエネルギーが必要である。そこで、特性、コミュニケーションの状況、コミュニケーションの基盤の状態の3つを詳しく知る必要があると考えた。

(ア) 心理検査を見取りに生かす

心理検査は、個人のもつ特性を客観的に把握することができるものである。心理検査の結果を支援に生かすために、WISC-III、K-ABC、ITPAの3つの検査について理論研究を行ったところ、それぞれの心理検査において、コミュニケーションに必要な力と関連のある下位検査があることが分かった。コミュニケーションに必要な力の中で、下位検査と関連があるものをまとめたものが表1である。表1を活用し、コミュニケーション観察シートで見取ったことと心理検査の結果を結び付けることで、児童のコミュニケーションの見取りがより確かなものになると考える。

表1 コミュニケーションに必要な力との関連

コミュニケーションに必要な力	関連のある心理検査(下位検査)
年齢相応の語彙力がある 場に応じた言葉が想起できる	WISC-III(知識, 単語), ITPA(ことばの理解, ことばの表現)
分かりやすい話し方ができる (順序良く, 大事なことを落とさないで)	WISC-III(知識, 単語, 類似, 理解)
言葉以外(身振りなど)の表現もできる	K-ABC(文の理解), ITPA(動作の表現)
場の状況が分かる	WISC-III(絵画配列, 理解), K-ABC(視覚類推), ITPA(絵の類推)
表情を読み取ることができる	WISC-III(組合せ), K-ABC(絵の統合), ITPA(絵の理解)
話の内容を聞き取ることができる	ITPA(ことばの理解, 文の構成), K-ABC(なぞなぞ)
聞いたことを覚えておく	WISC-III(算数, 数唱), K-ABC(数唱, 語の配列), ITPA(数の記憶)

(イ) コミュニケーションの状況が分かるシート

コミュニケーションの状況を詳しく見取るためのシートが、コミュニケーション観察シートである。これは、コミュニケーションチェックリストで得た情報を基に、もっと詳しく見取りたいことなどを考慮して作成するものである。項目を作る際の参考になるように、項目リストも作成した。各観点ごとに項目リストの中からその児童に合うものを選び、個々の児童のシートを作成する。そして、児童とかかわっている複数の支援者で記入することで、客観的にコミュニケーションの状況を見取ることができるのではないかと考える。

(ロ) 心の状態が分かるシート

コミュニケーションの基盤の状態を知るためのシートが、自己見つめシートである。これは、グループ研究で明らかにしたコミュニケーションの8つの基盤について、1つの基盤から2つの項目を出して作成した。児童が自分の内面を見つめながら自己評価をするようにした。

ウ 総合的に見取るために

特性、コミュニケーションの状況、コミュニケーションの基盤の状態、観察による気付きなどを1つのシートにまとめて表したものが個人支援シートである。1つのシートにまとめることで、それぞれを関連付けて捉えることができ、総合的な見取りができるのではないかと考えた。児童の特性やコ

コミュニケーションの状況，コミュニケーションの基盤の状態を，観察による支援者の気付きと関連付けることで，人とよりよくかかわるためにどんな力を付ければよいのかが見えてくる。また，このシートでは児童の得意な面も把握することができる。これらを支援へつなげることが，見取りを生かした支援になるのではないかと考える。

(3) 事例を通して

ア 実態把握

前述のような見取りの手立てを用いて，実際にAさん(小学校中学年)の見取りを行った。図3は，Aさんの個人支援シートである。見取ったことを関連付けてみることで以下のようなことが見えてきた。

- ・ 状況把握力がやや弱いために，相手の嫌がることを言うてしまうのではないかな。
- ・ 言語による表現力や理解力が高くないため，自分の気持ちが適切に表現できず，言動が乱暴になってしまうのではないかな。
- ・ 自己肯定感や自己理解という基盤が高くないため，気分にもラがあったり不安定になり，うまくかかわれないことがあるのではないかな。
- ・ 自己表出，人への信頼という基盤やコミュニケーションの関心意欲が高く，人とかかわることが好きなようだ。

そして，どんな力を付ければ人とよりよくかかわれるのかを考え，育てたい力を設定した。

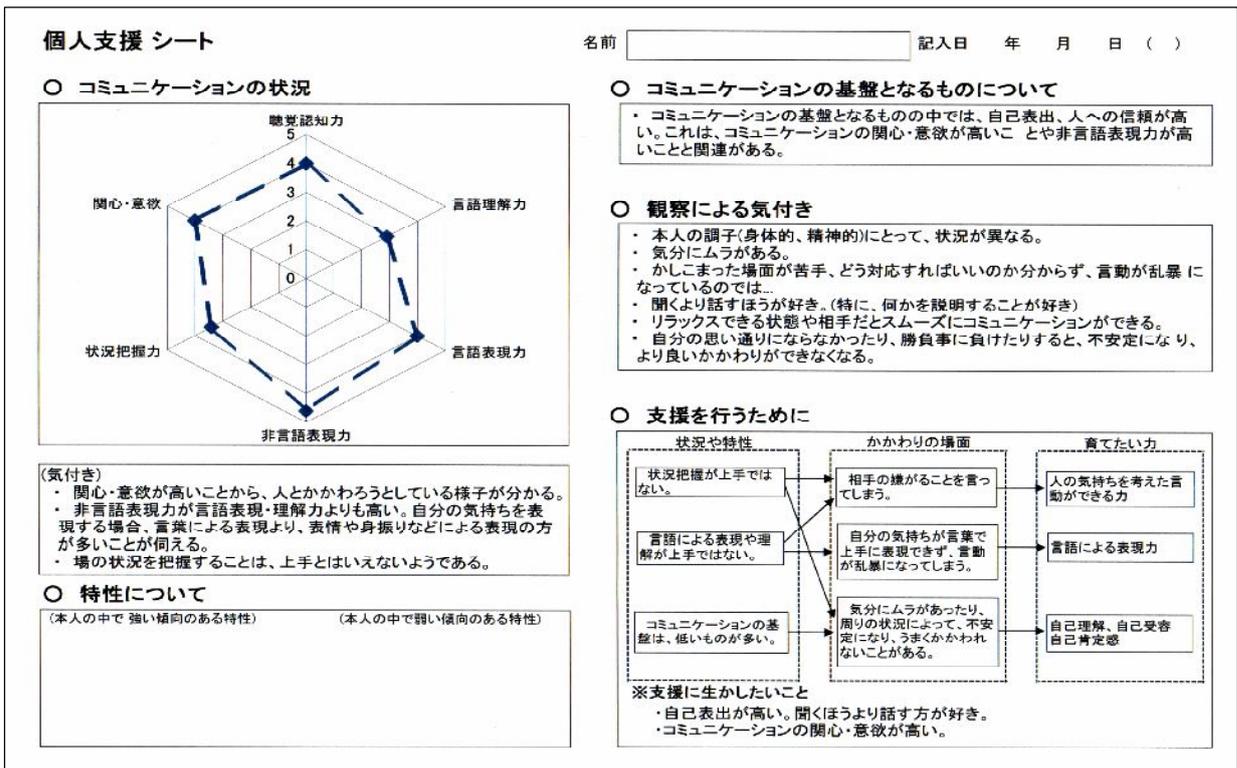


図3 Aさんの個人支援シート

イ 支援方針

実態把握後，育てたい力を，具体的に育てたいコミュニケーションの姿として表し，その姿を育てるための支援を考えた。支援計画を考える際に配慮したことは次の4点である。

- ・ Aさんの興味・関心や集中できる時間も考慮し，楽しく取り組める内容にする。
- ・ 1回の支援で力が付くものではないので，1つの育てたい姿に対して複数のエクササイズを考える。そして，段階的になるように順番を考えて実施する。
- ・ 支援を行ったら，評価シートを用いて必ず評価を行い，次の支援に生かせるようにする。

- ・ 支援計画は柔軟に考え、Aさんの様子を常に見取りながらいつでも変更できるようにする。

ウ 実際の支援

支援計画に従い、4回の支援を行った。Aさんの様子や見取りに基づく配慮点などをまとめたものが、表2である。

表2 支援と経過

支 援	Aさんの活動の様子	考 察								
<p>1回目の支援</p> <p>① アニメクイズ</p> <p>② クイズ「ぼくのこと」</p> <p>③ こんな時はどんな顔 (ねらい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しく自己表現をさせる。 ・ 人の表情や感情にも目を向けようとする心情を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 好きなアニメクイズには興味を示し、意欲的に参加した。 ・ 表情絵を手に取り、1つ1つ細かいところまで見ていた。表情の見方にはこだわりが感じられた。 ・ 表情絵には興味を示したが、たくさん提示したため、落ち着きがなくなった。 ・ 3つ目のエクササイズになると、時計を気にし始め、落ち着きがなくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 落ち着いて取り組むようにするためには、教材の量や提示の工夫が必要だ。 ・ 1回の支援に3つのエクササイズは多い。 								
<p>(配慮点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事前に予告をし、不安をもたせないようにした。 ・ 意欲を高めるために、好きなアニメクイズを最初に行った。 ・ 次回の希望を聞き、次回への意欲につなげるようにした。 ・ 集中時間を考慮し、今回はエクササイズを2つにする。 		<p>支援後の評価(評価シートより～5段階評価～)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="858 846 1343 891">育てたい姿</th> <th data-bbox="1343 846 1444 891">評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="858 891 1343 936">相手の気持ちを考えようとする</td> <td data-bbox="1343 891 1444 936">3</td> </tr> <tr> <td data-bbox="858 936 1343 981">相手の気持ちを考えた言葉を発する</td> <td data-bbox="1343 936 1444 981">3</td> </tr> <tr> <td data-bbox="858 981 1343 1025">自分の気持ちや考えを適切な言葉で表現する</td> <td data-bbox="1343 981 1444 1025">3</td> </tr> </tbody> </table>	育てたい姿	評価	相手の気持ちを考えようとする	3	相手の気持ちを考えた言葉を発する	3	自分の気持ちや考えを適切な言葉で表現する	3
育てたい姿	評価									
相手の気持ちを考えようとする	3									
相手の気持ちを考えた言葉を発する	3									
自分の気持ちや考えを適切な言葉で表現する	3									
<p>2回目の支援</p> <p>① アニメクイズパート2</p> <p>② いろいろな気持ち (ねらい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しく自己表現をさせる。 ・ 人の表情からその人の気持ちを考えようとする心情を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 好きなアニメのキャラクターの話を楽しそうにしてくれた。情報を教えてくれたりした。 ・ 場面絵を提示したことで、場面の理解がよくなっていった。また、表情絵や吹き出しを使って場面の気持ちを考えることもできた。 ・ 場面絵の上にそれに合う表情絵や吹き出しを自分から置くなど、活動への意欲が感じられた。 ・ 吹き出しに気持ちを表す言葉を進んで書くことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 興味・関心のある活動は、自己表出を増やすのに有効だ。 ・ 場面絵や表情絵、吹き出しは、意欲を高めることや様子や気持ちの理解に良い手立てのようだ。 								
<p>(配慮点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 前回好評だったアニメクイズを最初に行い、楽しく始められるようにした。 ・ 場面絵や表情絵、吹き出しは、1枚ずつ提示するようした。 ・ 次回の日時を伝え、見通しをもたせるようにした。 										
<p>3回目の支援</p> <p>① アニメクイズパート3</p> <p>② 好きなことすごろく (ねらい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しく自己表現をさせる。 ・ 自分のことを見つめたり考えたりすることで、自己理解につなげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ どの活動にも楽しく参加することができた。 ・ 好きなものにも、「ほうれん草は胡麻和えがいい。」「好きな所はスーパーの試食コーナー。」など、こだわりがあるように感じた。 ・ 質問に答える場面では、自分の心の中をそのまま素直に表現しているように感じた。 ・ 自分のことを話すだけでなく、支援者に質問もしてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 相手に対する質問や自分の心の中を表現するなど、これまでとは少し違った自己表現をさせることができたという点で、質問タイムは有効であった。 								
<p>(配慮点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 気持ちよく話せるように、受容しながらしっかり聞くことを心掛けた。 ・ Aさんが話してくれたことに対して相槌を打ち、共感していることを示すようにした。 ・ 次回アニメカルタに対する意見を聞き、教材作りに生かすようにした。 										

<p>4 回目の支援</p> <p>① アニメカルタ</p> <p>② ふわふわ言葉とちくちく言葉 (ねらい)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しく自己表現をさせる。 ・ 人の気持ちを考えた声掛けをしようとする心情を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アニメカルタには楽しんで取り組んだ。 ・ ふわふわ言葉とちくちく言葉をする事を伝えると、「知つとるよ。学校でしたことあるよ。」と、すぐ反応した。 ・ 表情図絵や吹き出しに興味を示し、自分から手を伸ばして、取って見ていた。 ・ 表情絵や吹き出しを選ぶ活動が上手にできた。 ・ 自分が言われて嬉しいふわふわ言葉を吹き出しに書くことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ふわふわ言葉が書けたのは、Aさんの心の状態が安定していたことの表われだと考えられる。 								
<p>(配慮点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 表情絵や吹き出しは選んで提示しポイントを絞った。 ・ 具体的場面を考えさせ言葉に目を向けるようにした。 ・ Aさんが言ったり書いたりしたことは、しっかり受容するようにした。 		<p>支援後の評価(評価シートより～5段階～)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>育てたい姿</th> <th>評価</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>相手の気持ちを考えようとする</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>相手の気持ちを考えた言葉を発する</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>自分の気持ちや考えを適切な言葉で表現する</td> <td>4</td> </tr> </tbody> </table>	育てたい姿	評価	相手の気持ちを考えようとする	4	相手の気持ちを考えた言葉を発する	3	自分の気持ちや考えを適切な言葉で表現する	4
育てたい姿	評価									
相手の気持ちを考えようとする	4									
相手の気持ちを考えた言葉を発する	3									
自分の気持ちや考えを適切な言葉で表現する	4									

エ 支援を振り返って

支援を行う前と比べて、Aさんの言動にも少し変化が見られる。以前は、自分の思い通りにならなかったり、勝負事に負けたりするとよりよいかかわりができないことがあったが、最近はそのような場面があまり見られなくなった。また、友達と一緒にするボールゲームなどにも、最後まで参加できるようになってきた。4回目の支援の後に、自分からみんなに声を掛け最後まで楽しくゲームに参加したことには、大きな成長を感じた。また、誰かに頼みごとをする時には丁寧な言葉を使ったり、乱暴な言葉を使ったことで注意をされたら言い直すなど、言葉にも少し気を使っているように感じられることもある。4回の支援で終わるのではなく、今後も続けて取り組むことが大切であると考えている。

5 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

児童の特性やコミュニケーションの状況、コミュニケーションの基盤という3つの視点で詳しい見取りを行い、それを総合的に捉えるシートを活用したことで、見取りを生かした支援ができたように思う。見取りを生かすことは、個に応じることになり、本研究が目指した適切な支援につながるのではないかと考える。これらのことから、大まかな見取りから詳しい見取りへ、見取ったことを支援に生かすという見取りから支援への流れは、適切な支援を行うための1つの手立てとしては有効ではないかと考える。

(2) 今後の課題

本研究で明らかにした見取りの手立てと見取りから支援までの流れを他の児童にも活用し、学校現場でできる具体的な支援や個に応じた配慮点などを整理していく必要がある。

《参考文献》

- ・ B・バックレイ 『0歳～5歳児までのコミュニケーションスキルの発達と診断』 2004年 北大路書房
- ・ 上野 一彦・他 『軽度発達障害の心理アセスメント』 2006年 日本文化科学社
- ・ 小貫 悟・他 『LD・ADHDへのソーシャルスキルトレーニング』 2004年 日本文化科学社